

醫業家譜

一



490.28

I

No. 2273  
15 i 111



富士川文庫

250

富士川家藏本

目錄

医業家譜元起第卷一

高千五百石  
高月俸十口  
高十二百石  
高千石  
高千九百石  
高二百俵  
高千石  
高立百石

半井大和守 成義  
半井卜養  
今大路中務大輔 隆庸  
岡本玄治  
曲直瀬養安院落印  
曲直瀬正英  
竹田治部卿落印 公欽  
三雲施藥院 宗顯



高五百石

高二百俵

高二百俵

高月俸二十口

高二百俵

高七百石

高六百三十石

高三百石

高二百石

高三百俵

高二百石

高三百俵

坂上地院  
坂真菴  
坂云道法眼  
坂玄節  
多記安長  
船橋宗迪  
秦壽命院  
曾谷伯安  
曾谷玄梁  
曾谷乙吉  
野間玄琢法眼  
成式

宗孝  
宗之

祐昌

義

祐壽

一之

祐昌

祐壽

祐昌



高千五百

半井大和守成義

高十人扶持

半井卜養

半井家ハ支廢地内より四家と氣氣丹波北支代ハ  
氣氣丹波北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代  
主え氣氣丹波北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代

院中北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代  
院中北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代  
院中北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代  
院中北支代として典の事のひよ氣氣丹波北支代

城列ニシテ都リ五面ノ火事ノ如クハ勿ニシキ

教矣

大御天子下され令旨と無國う難せり此の半井瀧菴醫事  
も又本業と申すて名義とて御心所に於く御醫の如  
きナシテ於御上御事

大御天子裏席お廻ハ御事ニ付ケ仁御と御事と移一かニ

少卿院先生於某寺にて御事御事ナキ人合を多幸  
れりと御付テ西園人之御年中未だ多サカナセ

高さニ早速之御事御事ナキ事御事御事御事御事御事

少卿院先生之御事御事御事御事御事御事御事御事

侍奉下

無事ニテ御事御事御事御事御事御事御事御事

立候之御事御事御事御事御事御事御事御事御事

少卿院先生御事御事御事御事御事御事御事御事

又御事御事御事御事御事御事御事御事

大歎之寄御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事

大歎之寄御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事

附口手より奉り 佛名而傳院及室即爲事と云ふべし  
主は蘆葦陽章延宗之年丙午七月大ア又通の院う  
生年を以て之れ曲草紙也と云ふと有言也丙午年十月初  
天正時延宗之年丙午之法名以傳院及室陽章大手主  
多江川主内田氏陽美ハ也と云ふ也ナシテ又云  
之の傳院一蘆葦紙と云ふと有言也ナム曲草紙也と云

常宣ひよかわく

文體

有章

有傳院大傳院之傳院也竟傳之年丙午也年三十也  
生て傳院一近言之年乙巳也生於此也

奉ひテ法名通の院室陽章也と云ふと有言也長  
男成義ノ傳院也并祥と云ふと有言也一也と云ふ  
傳院也と云ふ傳院也と云ふと有言也傳院也  
あやめと傳院也と云ふと有言也傳院也と云ふ  
高麗を丙午年乙巳之法名也傳院也室陽  
院也と云ふと有言也傳院也室陽也丙午年乙巳之法名也  
又傳院也室陽也と云ふと有言也

傳信

傳信也亦朝之傳信也と有言也傳院也丙午年乙巳之法名也  
傳院也室陽也傳院也室陽也丙午年乙巳之法名也

ナリナリアシテシトナラニ  
ナリナリアシテシトナラニ

萬葉セタクモシテシトナラニ

日暮セタクモシテシトナラニ

半井ト春シホシルニルヤシトナ

リ春シホシルニルヤシトナラニ  
シホシルニルヤシトナラニ  
シホシルニルヤシトナラニ  
シホシルニルヤシトナラニ  
シホシルニルヤシトナラニ

高千二百石

典故類

通之酒

今大路中智大浦 陽齋

今大路中智大浦 陽齋  
國庫ノ封底白ノ印而取之監主國相ハ世間那ノ内  
觀真うる今之信翠竹院道三曰磨とよに磨う母を  
因多立病中す信唐う跡アリて承の四十年ノナキモ之  
ハ用ひりて五度アリテ五度ナク又觀真矣云  
一トモ其方小母をやくと云々一怪体もあらず仰ゆ  
仰ゆのまじきと云長ともかくあらかじめ難かず

窮屈人而御るも一文の金等過たば國から病邪  
の門の内より一画筆の薦めと被れ名舟と  
ゆき室前あるて一義祥の術と種を以て  
四行の内に之を令後行うるを義祥の感言也  
かくして宣がすと移るに至る事けの所用  
薬の量ととねりし承稀丸西吉年の以て毛利  
元邦の如きは難うと死際よりとゆか毛利毛利  
抗争一多分の雪列より勝寄一萬と同と  
せし御元龍の事小左近一木下共初と云う  
天正三年甲戌十一月の事かされ  
天額と辞一立つて坐て脇筋と経て活血化瘀と  
腰筋と経て活血化瘀と

龜骨人少翁一主と肺鉢行うて大腰等の筋肉  
彦少序と全毛うるととあるとお朝席薦め  
嵯我天皇の御代弘仁二年、やうりて延喜五年よ  
法或傳と傳丸印一かの腰への年小延子廢絕  
せうがま今度一頸筋と尾筋と腰筋と腰筋と  
脚筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と  
腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋  
と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋  
と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋と腰筋

秀東道主おどと御代玄翁もくと  
御事とのて  
唐ももつれりとく學家と管曲院と号へる人是秀東  
流不接げりと曲直原の名まゝ一人走馬院と稱す唐  
御と文保四年正月廿日。すき年十冬月  
五日と博列十日とすと奉うは後と御年院一宿  
唐馬院と。この後はやと御とさかの口音不今御と  
漏せの言葉り。宗門入小枝けり。  
此盛と度由牛内と同を觀り。之と曲直原  
守真とし守大又と。不年とて。曲直原  
と。宇佐ち。一ゆまとからひと御大氣と。御年  
おらむと。まく

文淵閣

任ゆうて素行の不才が爲めと

口于年壬辰廿二月廿五日曲盡之少翁識

あやせ十三年中年ト高リ急のゆゑに病たりとせ  
思ひてそん子と御事修利勢へと之を元  
源氏よりのゆりたる年もとち故の傳承也とし  
元和九年至五年

東福門院の言ふ御事は既とてあと御  
口事とぞうりれ、

右傳は中世後ろのものとて御列と云ふが少々御と御  
寛永三年西家

右傳は中世後ろのものとて御列と云ふが少々御と御  
寛永三年西家

クナニ年也とて右傳は中世後ろのものとて御列と云ふが少々御と御  
寛永三年西家

相引と傳ふかくとあた衛馬と騒ぐ一うぢよ  
うぢよて正ふ天をせり行年三十歳生三月在の御列  
馬や早きうの事とは近延壽院毫庭元院と云ふ  
甲冑部のハ幼名をアヒミシテノ御名御清音と呼  
天和八年二月廿日

大歎くわいはよとされりとす亥年正月廿日御一典事記  
ちつて甲子年正月廿日御のちつ鹿毛の馬とト  
それと御年歎

御頬と絆一すまむ御うじと小拂手也と充  
正二酉亥年也と御事也有りとて御と御年  
奉事又御はほほ御也とて御白夜さると今までよニ

不思議なり。上半身は右の如く。世事三十数年。  
死後せう洋服を身に着けず。死後近親院安置。左側に身

多聞多詮也傳歌後ハ觀山うてよもやをかく風年  
於之傳也見るやうと章名と大なる事一新 宣承年  
年をもの附するをめぐらすとぞとぞとぞとぞとぞと  
得て一とぞとぞとぞ春日もやれせりワキ一年年ニ有  
上系相國主とおして勤皇す一とぞとぞとぞとぞとぞと  
はとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと

此卷あとで御より三年三月廿二日より曲葉のとく  
口四年三月未ニテナリ。上事は御取の軍年刊書一四年  
參る。尚達軒と號す。たゞ此一卷の如き  
口五年二月十三日御のどへ居候御教と申さるの本  
美年たちつて小門へ曲直原奉多虎と御名代と申す  
御あり。四年五月二十日御のとくとて  
久今吉左衛門と申せり。享保三年四月廿二日  
口傳とつてより四年二月十九日御名代と申すと  
口五年二月二十二日御名代と申すと申すと  
上見よ候。この時

有傳之清並せり。後とて御うち又三年丁酉未月  
暮れより年三月十一日御名代と申すと御名代と限申  
院高ひと申と

觀顯著述書 淸漸 尚友堂文集

七言歌之元和八觀顯之二月十九日ハあすとて  
宝永六年正月十九日御名代と申すと御名代と限申  
有傳之清又一年二月十九日御名代と申すと御名代と  
小也。御とちうておもむき御馬代と申すと御名代と  
口五年二月十九日御名代と申すと御名代と限申  
ゆく。御名代と申すと御名代と申すと御名代と限申

連署とて之に由れば奉公と仰る文草一丁已ナテナリ  
又誠願うまく處不勝り之年丙午ニテホウシルトアリ附  
波多也と板子利曾一ノアシト社として後富吉九年至  
テナリトモ事故多キ死ミ一祥事等よツツカス  
法名草竹院支園主作ヒシタリ  
法名草竹院支園主作ヒシタリ

八月廿五日之妻壽圓吉居て左清右近を肺門和田年三  
十九年二十八歳一ノアシト死を嗣スラム全弟少少而  
福と爾ムとセ

左肩無疾之肺而病度小或近之肺上身もと實也之  
之無氣うるうたうる實の多年量モナカナキ年三入  
ノアシト死矣マクノ所モ即ち其未だ有る所也

二右肩の筋觀此と皆半筋と云はば無也之  
十日右肩の筋一觀此と皆半筋と云はば無也之  
之無ニ右也怪所う子極ゆ而肺上身もと實也之  
之無ニ之モ子中發之肺上身もと十而自其中發之  
子ニ而之とよ續して之年上身もと

## 今大路家系圖略

橋姓

宇多屋

本國山城

紋冒落葉範騰 五七桐

佐々木成頼六世佐々木太郎左衛門成定綱立

馬淵左衛門尉廣貞三男堀部左衛門成綱八世

堀部丸門穂真長男

正盛

今大路翠竹院道三  
曾祖賀多復津守絅清婦

守真

早世

女子

祖父正盛養女

正紹

近室院道三法印  
實守真女

女子

正紹妻

曲直瀬玄蕃法印

鳥尾列家醫師

親清

典薦助  
兵部大輔  
号道三元遺

女子

曲直瀬養翁正琳妻  
元山内膳  
王高妻

女子

曲直瀬平徳院正因妻  
後嫁于國本玄治

女子

浦野正三郎  
後嫁于田中清六妻

祐智

教學院  
天台宗戒列愛岩教學院住職

親昌

藤三 民部大輔 道三  
舟渡邊宮内少輔女

女子

石尾志摩守治昌妻

女子

吉田壱丸門 妻

女子

曲直瀬玄隆妻

親氏

兵部大輔

典薦助  
早世

某

主水

早世

女子

内田玄岱 妻

再嫁奈須玄竹法眼

女子 伊東主税 妻

親顯 主税 次郎大輔 道三  
母津延土佐守信義女

女子 人見又兵衛行充妻

女子 早世

某 大力之助 早世

元勲 乙之助 民部大輔  
舟家女

某 万里之助 早世

方基 奈須云節  
為奈須云子

立乃次郎 早世

壽國

乙丸兵部大輔 道之  
舟石川龍門總明珠

女子

久志本左京 常式妻

女子

依田一學守庸妻

正福

兄養子

女子

早世

正福

安之助 兵部大輔  
次郎大輔

親興

寔房  
海根来兵内正武二男  
旌土節

女子

親興妻

女子

爲親興養女  
嫁正庸

女子

正庸

梅之助 中務大輔  
實山高士雲信筋男

高千石

岡本玄治

是年九月廿四日來至江戶大隅田中行院通之正門入門にて  
醫事は驚くも一矢をとて下さるべし御心と仰。都勦の代  
御と奉事するばかり。天正十一年夏あたへうつ之聲を察  
典院と通じて之を施行して之を經由院と名づけて之をも  
主徳と申す。日本五十四と云ふれども之をも

主徳より得て之の後宣平年等も

大歎の如不例れど何う主徳の修業と仰りれハ勿シモ  
其性を知り候ゆ。かくとて之を醫術と感美せらる

口右の年以降は止むに止まぬ例の如も主徳の修業歩革を期  
トシハリ。之れん後は之は氣呵トせんりと爲  
意の如きとて之れを用ひて主徳の修業を進むる。其後は  
トシハリ。之れに保全年を以て口右の年まで主徳の修業  
医事の如きの詳書を之をも法經と陶室と名居と仰り  
モ主徳の如モ琳派の如也。

大歎より得て之れを主徳の修業と仰り作

之を正月に於て西保全年を以て主徳の修業と仰り作  
主徳の如きの詳書を之をも法經と陶室と名居と仰り  
年終ニ主徳の如モ琳派の如也。設局行ひて五年をも  
足らずして之後主徳の如モ琳派の如也。又醫道院も



玄治の子孫は、後醍醐天皇の御子の高千九百君が、  
實木守泉守長綱の子孫である。

### 図本家系圖

○○図本玄治

啓迪院

○○図本玄治

啓迪院

○○玄琳

啓迪院法眼

毒仙

啓迪院法眼

玄治

啓迪院法印

玄治

毒仙啓迪院

某

早世

某

早世

女子

早世

女子

早世

女子

早世

玄治

玄琳

女子

實木守泉守長綱

高千九百君

曲直瀬養安院法印

曲直角あはきをすくねりあらうとせんそくの院西院  
令の所とて石壁の門とて磨きと而く頬に拂ひうる  
牛の方側に花園と寝室とあるのうち豊臣歎下れ  
門番へおまかとめの腰功にしきみかくとて三の壁の  
皇室と花園とて門人は草む生す廣きとく  
曲直角と二階の塔にしきみに曲直角が花院  
と称へ

東屋と階上一間の間とて

高木と竹の山腹にてうる年付の石碑と床石  
佛殿の天直子と花子と法縫と一布吉澤と名づく處

天正十五年正月の又吉屋代  
井の頭とされおとせとて御前了令

常喜とおとせとて御前了令とて御前了令とて  
天正五年正月とておとせとて御前了令とて御前了令  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令

乙卯ノ月

常喜とおとせとて御前了令とて御前了令とて  
とて御前了令とて御前了令とて御前了令とて御前了令

常意のうへ得るべからず。一束一束と積み重ねて、後享保八年  
甲辰年十一月、又古川書院より贈りて、此處に之を納め  
まつた。而して古川書院は、行水の名前を、甲辰年秋成  
侍の聲にて、これほんの餘事とぞと傳説しておる。

延祐丙午歲之秋月  
吳中子天祐子之子  
仲子之孫也

法師の正達と申へて姓村姓氏もあらずと申す  
二重の姓と申す者也一重の姓——二重の姓と申す  
之を竟保之年、至寶印をうつし少室と號を乞ひて之  
と仰名を尊ぶるよりて少室と號を乞ひて少室と號を乞ひて  
之を正達と申す者也

高二百俵

曲直瀨正英

嘉慶二十五年正月廿二日  
曲直風素子德院正序

嘉慶乙未年仲夏  
吳昌碩作

十五年三月廿日午後一時半西風正烈也少和之故  
事他二面倒と稱すり少焉佑他大之保主其事は既と  
てより毒傳院と名と以て更に西風の事を度て死を一  
切いたさる西風の事ハ西風三年ニ度たり也うすり又  
高毒傳院ウチ既と云ひて之の後と云ひ——少焉佑他大之  
於市中うれと云ひて西風至已アリ乃ち——  
有三年之久謂之——此之謂也毒傳院——少焉佑他大之又云曰毒傳  
院主之をもとす西風毒傳院主之を毒傳院と名と  
いふ事は既と云ひて行の事也うるゝ事也少和也

高子石

竹田治部卿法印公欽

行國事ハ後事也トモアリテ、首領時之陽陽了在也  
廢帝也トモアリ。 梵書也トモアリ。 本草也トモアリ。 行國  
詔語也トモアリ。 律也法也アリ。 雜也アリ。  
御國事也トモアリ。 本草也トモアリ。 律也法也アリ。  
廢帝也トモアリ。 儒仲也トモアリ。 律也法也アリ。 金石也アリ。

奉書言之過失一多，恐非所當。但不知其事  
云何？請乞一言，以解其疑。

大歎氣也。嘆氣者，多是氣虛，或氣陷之症。

寶慶二年，平半十日，丁巳。

大歎氣者，多是氣虛，或氣陷之症。又因寒而生寒，  
亦有因熱而生熱者。此皆氣虛，不能運化，故生此症。又  
有由氣虛而生熱者，則有行因之症，如實火、虛火等。

冬年，辛卯，十一月，丁未。

歎氣者，多是氣虛，或氣陷之症。又因寒而生寒，  
亦有因熱而生熱者。此皆氣虛，不能運化，故生此症。又  
有由氣虛而生熱者，則有行因之症，如實火、虛火等。  
一氣之寒，一氣之熱。

常嘯氣者，多是氣虛，或氣陷之症。又因寒而生寒，  
亦有因熱而生熱者。此皆氣虛，不能運化，故生此症。又

有由氣虛而生熱者，則有行因之症。如實火、虛火等。  
一氣之寒，一氣之熱。

嘯氣者，多是氣虛，或氣陷之症。又因寒而生寒，  
亦有因熱而生熱者。此皆氣虛，不能運化，故生此症。又  
有由氣虛而生熱者，則有行因之症，如實火、虛火等。  
一氣之寒，一氣之熱。

常嘯氣者，多是氣虛，或氣陷之症。又因寒而生寒，  
亦有因熱而生熱者。此皆氣虛，不能運化，故生此症。又  
有由氣虛而生熱者，則有行因之症，如實火、虛火等。

あり難いのととて御一ツも本陣御とちうど  
ありて世へる所を替へる事へて本陣御と  
取てお詫びはやうござり候ふ

高力而志之序

赤城山原  
金城山原

三書院草堂集

ニキテ施設事院のあハヤニ常取スル  
大利  
禁錮セシ厚師たゞニ医事ナシトキモ  
トシトモ年取れ所ハモテレヒトニニキテ施  
事院とモトシ延室を手ナリテム時也モ施設  
事院とはモ施設事院と称シテラニ之ナシニ  
文房書事ニシテナリナリ又ヒ医事ナシ施設事院  
モセリモハシナリヤウタトキモ——また施設事院  
トシトモトセ——モトシトモ

高立百石

坂上地院 宗孝

乃と化後せし所は皆初風即ち御中興の慶焉うる  
慶と曰く奉るに及び三月後とて御中興の慶焉と名洗法  
下貴福を乞ひ居候ト以て之を奉と申せしと云

奉應事と謂ひて是を乞ひて御中興の慶焉と申せしと云  
嘉永十三年四月廿九日御中興の慶焉と申せしと云

陽月一仲冬ト以て之を

立庵の所これうち奉應事と申せしと云  
丁卯一年秋立庵と仰て有り立庵事と申せしと云  
立庵事と申せしと云事と申せしと云

宗成

立庵の所立庵事と申せしと云事と申せしと云

立庵

大敵の所立庵事と申せしと云事と申せしと云

寛永元年立庵事と申せしと云事と申せしと云

嘉永元年立庵事と申せしと云事と申せしと云  
丁卯一年立庵事と申せしと云事と申せしと云  
立庵事と申せしと云事と申せしと云事と申せしと云

伏見中門應事と申せしと云事と申せしと云事と申せしと云

立庵事と申せしと云事と申せしと云事と申せしと云

嘉永元年立庵事と申せしと云事と申せしと云

吾相既至是來林と申りも了ばと宣説滿言及言  
え年ふう又と化院うちをとれとてふと而當一 安樂  
二年登のそす一おほよ多き一ハニキニ五林す  
草木はらと傳聞院滿翁益事とトクノ滿翁もく  
レニモ内徳高卿より出るとならまく一さくさき又とれ  
院うちあらとせきと御ひ五百とアラレニアラ露  
ううと化院事帝とアラルハ年ゆ生ヒテナリ  
死ミテクレハ内徳高卿をば名屋厚院寧月院  
モモークモササガラスナレ化院ウヰアドアラ  
大指モモと物モ少吉佐にアラシモシテ化院と改シ  
セモアラスナレ化院貴祐ウアラシモナリル  
身書と申すと云

高歌百俵

坂真菴宗文

乃と化院は事ト申れりアラセ事ひアラミ事ひア  
ニミトトクノトハシモシテ御院ノ精一ノノ  
大歎之れハシモアラシテアラニモナリアラニモナリ  
仰アリ年を度アラケテ不全一ノモナリテ御院ノ直也  
之舞アラシモシテ御院ノ精一ノモナリテ御院ノ直也  
字真とアリテアラニモナリ一也此年一景也

至治乙亥歲九月廿八日  
憲廟之御尚一歲而逝  
丙子年三月廿八日又寢廟之御  
乙未年作二石像以奉之  
丙子年作石像以奉之  
丁丑年作石像以奉之  
戊寅年作石像以奉之

實之不無也。今之不復者蓋其事也。又其後  
之不復者。故實居常矣。乞歸之。而歸之  
延喜之年。是三十載也。又之數十年。則  
二十有餘也。而今之常居也。固以久遠也。而  
丁氏之子。既已知其惡。而忍而不去。亦可謂  
不知也。其後又二年。則其子之甲也。而其子  
又一子也。其子之子。又一子也。則其子之子  
實居常矣。乞歸之。故其子之子。亦當之也。  
西軍北出。又常居常矣。是以而後之。復至二歲  
之後。——其事信也。而節化之。則其子也。其子

高二自傳

拔玄道法眼

臣等處々あらず也と而既は事常居り候てたゞ候事  
あるる事ニハ計測と以てせよ然うに之を察する事

卷之三

大歎より五十九年後之とてはんと保三五年を以て去  
すが當初之而後五年後又これを承りておどせ

卷之三

丁巳年夏月

清有之此所作之畫皆屬厚道而心胸之高明者也

高二十人扶持

坂玄箭

日本書院の圖書室にて  
計画と書類と

義有子不如此也古國原と今也子れ年少之而能之御  
これを極之秀としテ之を極三度ハ一対文三事是子れ

大樹了道見——あらわせたる所——おもむきの事にせよおもむきの處  
五音うかがひと能作年三の所とや處——あらわせたる

ひのきくらべ  
筆

上原文輔  
一  
元禄三年夏  
東北の事  
伊勢と山口の間  
十日間の間  
他處より是を因る所  
其と並一書を以て  
之を四十日  
其の後又其の後  
又之を元禄十三年夏  
止む  
此の如きをもつて  
陽子  
已處と秋の事  
伊勢と山口の間  
四月半  
其の後又其の後  
又之を元禄十三年夏  
止む

憲廟之祥瑞。丁巳夏中元庚午年庚辰月丁巳日

（續）

西元二年壬辰八月廿日又書於東坡居士  
年八十有四而作此詩於東坡居士

高二百俵

多記安長

多忙のため筆業とまことに西園寺と丹波守のことを名乗  
康祐はうそと偽の書類を用意するが、緑庵の新しくなった  
書類の文は假物ではなくて本物である。緑庵の筆跡  
で御子の名前を書くと伊藤と申すが、これが「大内」  
名をもつて東洋の佐江と申す萬康の假名である。

大敵より脱出する事多々あり其の事は此の如き  
高麗の内に傳する事多々有り候事と  
今も然る。

大敵より脱出する事多々あり其の事は此の如き  
高麗の内に傳する事多々有り候事と  
今も然る。

敵有る所を脱出する事多々有り候事と  
又医訓

金保等至つ事ナシ又其子孫と仰

少子無し因て子孫有り候事と云ふ事と仰

十事無事成ナリと云ふ事と

既に之を傳承二百年と云ふ事と  
傳承少子無し因て子孫有り候事と云ふ事と  
安永時に之を傳承する事と云ふ事と  
其時少子無しと云ふ事と云ふ事と傳承する事と  
御所に之を傳承する事と云ふ事と傳承する事と  
少子無しと云ふ事と云ふ事と傳承する事と

## 多記家系圖

本名兼康政金保  
本國山城

後漢靈帝十二世孫丹波康頼之子俊雅  
十七世孫左京大夫典薦頭兼康之嫡男  
頼定九世頼元之養子實加茂氏男

○兼康玄泰

改金保氏安齊  
亦改金保道訓

金保安齊

始岩之丞  
金保安齊

多記安元法眼

實多記氏

女子

養安元法眼妻

多記永壽院法卯

始安長

女子

牛宗供妻

多記安長法眼

多記安良

湯川安貞

銅之弔

女子  
山崎宗徳

女子

湯川安道

大村立郎

多記貞吉

高七百石

船橋宗迪 玄鼎

形格家ハ古國ニ傳シテ天武天皇之十二代九孫也  
或級少而後是年也朝臣重賢之才之而後始名元孫ハ  
あそ二年丁る後馬よしれ知らうと屢々すよ申く事

辨病と法。此の二事と爲て医業と爲る。

禁錮され革制と爲る。即ち年未  
六月のままで爲る。之にて禁錮せし年未  
之故又は革制と爲る。即ち年未と爲る。

既に禁錮と爲る。年未年未一年未

高齢より不老と爲る。侍歴より

は少く數えられ。即ち年未年未年未年未  
年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未  
年未年未年未年未年未年未年未年未年未年未

高齢より不老と爲る。又長寿者より

生年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

年未年未年未年未年未年未年未年未年未

有体高と爲る。即ち又言ありかと云ふ。

之早世にて年號二十よりは御子を三番目と  
隋後院ろ心の至りてうらむと車を走ら大御多新又  
代本多と通じてそよと玄通と号ひる

### 弘橋家系圖

清原姓  
本國山城

○天武天皇 舍人親王 御原王 小倉主 夏野

海雄 房則 葉恒 廣隆 賴隆 定滋 上文康

祐隆 賴業 仲陸 良業 賴尚 良季 良板

宗向 良兼 宗季 良賢 賴季子 宗業

良宣 從三位 宗賢 從三位 宣賢

弘橋太郎大輔

弘橋大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

業賢

秀賢

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋太郎大輔

弘橋宗迪法眼玄瑜

弘橋宗迪玄倪

始好菴

長菴

母戸田左工門重長女

妻室賀下綱守正信女

某

女子

早世

川井七十郎妻

船橋真菴玄道 早世

早  
世

松橋新二郎  
早世

早世

船橋泰軒

1

宗迪玄晶門

宗恒

卷之二十一

藤本二十郎妻

十一

卷之二

和田春長正史事

女子

高二首集

秦  
秦余院

秦余院院號也。徐福りまつて。唐の秦余院。  
章とひもと墨世とて。信陽の石屋也。

中無秦余院院博圓疏。又秦余院の御之  
御之御之御之。

大敵され少佐の腰から。言ふ事無く。左の手に  
之を取る。其の腰から。左の手に。秦余院  
之を取る。右の手に。秦余院。徐福元孫。

常高文子元和九年作于西都  
時年七十有二

予嘗言保身者年也。辰夕者時也。病者疾也。

院事一ノ事ニテハ前様作中之御事と申ムシト素令院と  
大相馬ノ事ニテは前院と申ムシト素令院と申ムシト  
常院様作と申ムシトナラ申セム

高士百石

曾谷伯安

曾否れあはる事否れ事は御事は御事は御事は御事  
枝一々御事は御事は御事は御事は御事は御事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

東都之言也。猶人之說也。其後又出。

この本は古物の文書である。

大敵に付するより後作二十日と算定して御用事

予之生於世也，始於八歲，又十一年，壬午年二十有二，而入

了後又一筆寫在後二筆之上。又似有過

口十三年 拾元至三一  
之子重光淳四年  
又拾元之孫也

常高之子治久ノ子也。子治久侍郎。常高之子也。

子治久也。侍郎也。常高也。常高也。常高也。

治久也。治久也。治久也。治久也。治久也。

常高也。常高也。常高也。常高也。常高也。

高三百辰

甲辰年夏

常合乙吉 一之

高者玄氣已去其氣也之是也未有不如此

高三百辰

野間玄珠法服成式

也方れや也ハ也方至而とくの良惡皆得之而之  
禁程也而用とて先之の都競福也とて多  
世と謂之也

玄德之作事も多也とてこれ侍慶とて至徳

大歎之也而事よ其事也使之在すとて下  
仰之丹門也うほくすのやうに也  
正事も多き也而其事也方全之役也  
之を而序也とて年もとひと保二年也とて年  
之をせし事也和事也とて年もは不素の院五孝之  
除とて其事も多き事也又とて除く其事も多  
不廢也とて其事も多き事也又とて除く其事も多  
正事も年もとひと保二年也とて年もは不素の院五孝之  
序事也和事也とて年もは不素の院五孝之

事も多き事也和事也とて年もは不素の院五孝之

セイホウジヤウモトノタツヒテハシヨウの院徳満之行と  
モモークモ御立ヘモモニト仰ヒラム

野方吉孫よりある書簡  
之の上半部を抄上す  
西暦一九〇九年九月廿二日

歲有之常熟一歲無常熟一歲有之常熟一歲無常熟

吉田氏は國守より不承すありりもうえ御三年  
在りある野アラモ原と曰ふる所にて居まつて向  
多モよあやしく 俗名と仰へる者也と云ひて居  
在りやうがお前と曰ふる所にて御六年

常熟縣人。明嘉靖甲辰舉人。官至刑部員外郎。

三日後と十日後——少しずつ化とくらべて、何處か異  
なるところがある。少しずつ進歩するが、何處か止ま  
るところがある。止まつたところは、必ずや、前回の  
進歩の跡がある。止まつたところを、必ずや、前回の  
進歩の跡がある。

高三百儀十人扶持

淡江長伯

泥は年々元年號よりして泥江室舊法傳沿用を至りて  
原と書く事多しと爲る

夢得人不識其名後以詩贈之一也  
元祐丙午歲中和年甲子仲夏  
王聖俞自開基元士法君通鑑後  
嘗與之同游於長沙八

大歎之曰此其年行之而猶月行十  
九

卷之三

歲在己卯夏月  
同人游虎丘山  
見一老翁  
持杖而來  
問之曰  
君何不乘此  
良辰美景  
以垂竿於湖  
上乎  
老翁笑曰  
吾年已高  
不能垂竿  
吾惟喜  
游山  
觀水  
以自娛耳  
吾子若欲  
遊此山  
吾當為  
導引可也

寛永丁未年正月一日  
御内侍奉事とて御内侍奉事  
御内侍奉事とて御内侍奉事  
御内侍奉事とて御内侍奉事

了のう西風——あわせと晴れを併風あさする  
ひま年ニテアリテテテテテテテテテテテテテテテテ  
清音樹徳院法事靈洋松としとしはははははははは

有德之士多能忍辱。信厚者尤甚。歷千年而未亡。

之御在りて、うりや二年丙午十二月也。又左記の事  
至日往々奉りてはと重院法師願西道主と  
是もその是後風雲ハ既又重院法師より賜應  
不外とすと重院法師丙午年庚戌之御在りては  
之御十日と御之て松軒と號す。此より之を  
而してからへり。宝曆十三年壬午正月御在りて

明和三年 西成又ノ子也、江戸を清石とて御院  
奉行官候とし、之をも居重乳。宣德十二年、五年  
十ニ歳のとき、家と難を御す。井ノ町にて  
少喜院と名づけられ、五位佐十人候とす。嘗て、  
御宿松野陣風をよ長伯姓長と連呼せり。



